

SDGs時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方

著者	谷口 一也
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	137-146
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000586/

SDGs 時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方

A Study on the Field ‘Environment’ of Study for Kindergarten in the Era of SDGs

谷口 一也*

Kazuya TANIGUCHI

抄 録

2015 年に国連から SDGs が提唱された。変化が激しい現代において、社会の持続可能性を達成するためには、より自主的で、多様な考え方ができる子どもを育てていく必要がある。本研究では、平成 29 年に告示された幼稚園教育要領に示された方針と SDGs や ESD との関連性を明らかにするとともに、保育者教育のあり方を検討するために、現在利用されている保育者養成課程用の教科書から、現在行われてる保育者養成に SDGs や ESD の考え方がどれだけ取り入れられているのかを考察した。

現行の幼稚園教育要領には、持続可能な教育に関する記述が含まれており、直接的に ESD の考え方を取り入れた教育を行っていくことが示されている。しかしながら、保育者養成課程で用いられている教科書の約半数において、ESD という言葉や概念が記述されていないことが明らかとなった。この ESD の考え方を取り入れた養成課程カリキュラムには、ESD に関する直接的な記述に加えて、地域社会の行事や文化に関して、少子化などの課題背景、さらには多様な子どもを育てるうえで必要な特別支援に関する事項が必須であると考えられる。これら全ての記述がある教科書は見当たらず、SDGs 時代の保育者養成に関して、SDGs や ESD のより一層の理解と内容の改善が必要である。

I はじめに

近年、国際社会が新たな開発目標の達成に向けて動き始めている。その目標である「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals、以下 SDGs）」には、貧困や格差の解消、教育や保健の充実、ジェンダー平等の達成、気候変動への対策、平和で公正な社会の推進など、世界中で取り組むべき課題が定められている。この SDGs は、2001 年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択されたものである。発展途上国、先進国に関わらず取り組まれており、日本でも積極的な取り組みが始まっている。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

SDGs には、17 個の目標と 169 のターゲットから構成されているが、このターゲットは、例えば「2030 年までに、現在 1 日 1.25 ドル未満で生活する人々と定義されている極度の貧困をあらゆる場所で終わらせる」のように、期限とともに具体的な達成基準が示されている⁽¹⁾。このターゲット達成のために、国、地方公共団体のみならず、企業や住民、個人などがあらゆる方法で 17 個の人類の現代的な課題解決に向けて取り組んでいるのである。

学校・園においても SDGs に対する取り組みや教育が始まっており、幼稚園教育を考えていくうえでも SDGs を踏まえた指導が大切になってきている。これまでも幼稚園では「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: 以下 ESD)」の考え方に沿った教育が行われてきたが、SDGs の視点から再検討を行う必要がある。これは、いわゆる「SDGs ウォッシュ」に陥らないためにも重要である。「SDGs ウォッシュ」とは、SDGs の考え方に沿っているように見えて、実際にはターゲットの達成に負の影響を与えていたり、SDGs に貢献していなかったりすることである⁽²⁾。幼稚園教育において、SDGs に貢献していないこと自体が問題になることはないが、現代的な課題の理解に繋がるような取り組み、教育を行っていくことは教育の使命ともいえる重要なことである。

そこで、本研究では、SDGs や ESD の考え方が幼稚園教諭の養成課程でどのように取り入れられているのかを明らかにし、特に関連の深い領域「環境」の今後の在り方を保育者養成課程で用いられている教科書をもとに考察する。

II 幼稚園教育要領の改訂と SDGs

II-1 領域「環境」のねらい

平成元年告示の幼稚園指導要領において、自然との触れ合いなど身近な環境に関する領域「環境」が設定された。そこから 3 度目の改訂が行われ、現行の幼稚園教育要領は、平成 29 年 3 月に告示され、平成 30 年 4 月に施行された。その中の領域「環境」では、そのねらいとして次のように記述されている⁽³⁾。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだし、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

ここでいう身近な環境とは、周囲の物理的空間のみでなく、幼稚園で時間を過ごす中で子どもが五感を通して感じるすべての環境のことである。子どもは、その環境に遊びなどを通じて興味を持って楽しむ。また、ねらいはそれぞれ学力の 3 要素につながる基礎的な内容である。

(1) は「学びに向かう人間性・態度」につながり、(2) は「思考力・判断力・表現力」につながり、(3) は「知識・技能」につながる。当然のことではあるが幼稚園教育は、それ単独のものでは

なく、小学校以降の学びの基礎をなすものであり、非常に重要な教育課程である。

保育者はこの「環境」のねらいを達成するために、子どもが主体的に遊べるように留意する必要がある。そこで、できるかぎり子どもの考えや状態を理解したうえで、環境を構成するとともに直接的なかかわりをしたりしなくてはならない。

Ⅱ－２ 領域「環境」の改訂のポイント

平成 29 年 3 月に告示された幼稚園教育要領では、以下に示す点が主な内容として改訂された⁽⁴⁾。

２ 内容

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

３ 内容の取扱い

(1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。

(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

※下線部（原文のまま）：主な改訂ポイント

内容及び内容の取扱いに関し改訂点を整理すると、以下の２点が重視されていることが分かる。

①自主性を育むこと

②地域社会や伝統に親しむこと

自主性や主体性を育てることは、「環境」のねらいにもあるように、これまでも重視されてきた。今回、特に重視された自主性の内容としては、「自分なりに比べたり、関連付けたり」や、「自分の考えをよりよいものにしようとする」などである。これを実現するには、子どもが体験したことに関しその経験を深めるために、保育者が思考や表現を行うように環境構成を行い、適切な声掛けを行う必要がある。子どもは毎日のように「はじめて」を体験する。この「はじめて」を大切にし、共感し、肯定していくことが子どもの体験をより豊かな経験にする。また、この体験を別の子どもや保育者、保護者に表現活動（言語や造形など）により伝えることで、自分なりに比べ、関連付け、

よりよいものにしていくことにつながる。

②の地域社会や伝統に関し、今回の改訂で重視された背景には、核家族化や少子化に伴い、地域のコミュニティの結びつきが薄れていたり、地域活動の希薄化が関連していると考えられる。地域に子どもがたくさんいたときには、お祭りなどのイベントや夕方、休日に近所の子ども達と一緒に遊ぶ機会が多かった。これらの活動が少なくなる中で、地域社会の文化や伝統を守る拠点として保育園、幼稚園はその機能が大きくなっている。このことを踏まえて、より地域社会に密着した教育活動を行っていくことが、持続可能な地域を実現するのである。この地域の持続可能性に関しては、前述した ESD、SDGs の考え方を踏まえる必要がある。

Ⅲ SDGs 時代の領域「環境」のあり方

Ⅲ－1 SDGs 時代の学びのあり方

第 1 章で述べた SDGs 時代の学びには、第 2 章「環境」の改訂のポイントで述べた「自主性を育むこと」が大切である。また、これまでの体系化された知識・技能を身につけるだけでは通用しない。SDGs に代表される様々な課題に、現実的な解を出していくには失敗を恐れず、試行錯誤しながら解を創造する主体性や、生涯学び続ける「学び方」を身につけていくことが必要である。子ども達は本来、好奇心旺盛であり、この気持ちに答えていく環境を整えることこそが、最も重要なことであるとする。

また、各国、各地域で課題の解決の方法は異なってくる可能性があり、より複雑で、他の地域で成功したケースをそのまま適用できるとは限らない、困難な状況にあるといえる。SDGs の各課題や目標をどれだけ地域や自分ごととして、落とし込み、解釈していくのが鍵となってくる。特に社会的な変化の大きい事項としては、IT 技術に代表される科学技術の進展が挙げられる。その影響で様々な職種で自動化が進み、職業構造までもが変化してきており、IT 技術や情報処理・情報発信技術を身につける重要性が増している。そのため、学校では、情報活用のための課題解決型の学びが重視されるようになってきており、園においてはこの点を意識した基礎教育が行われるべきである。

Ⅲ－2 SDGs 時代のコンピテンシー

SDGs 時代に身につけるべき資質・能力に関しては、経済協力開発機構の「キーコンピテンシー」が参考になる。キーコンピテンシーとは、「単なる知識やスキルだけではなく、技能や態度を含むさまざまな心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈のなかで複雑な要求に対応することができる力」⁽⁵⁾ であり、まさに SDGs の目標の達成に向けて必要な力である。キーコンピテンシーは同部会の中で、以下のように整理されている。

1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
 - A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力
 - B 知識や情報を相互作用的に活用する能力
 - C テクノロジーを相互作用的に活用する能力
2. 多様な社会グループにおける人間関係形成能力
 - A 他者と円滑に人間関係を構築する能力
 - B 協調する能力
 - C 利害の対立を御し、解決する能力
3. 自律的に行動する能力
 - A 大局的に行動する能力
 - B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
 - C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

「相互作用的に活用する能力」に関しては、情報収集及び理解に加えて、収集した情報を組み合わせ考察し、資料としてまとめ上げることが出来る能力である。「人間関係形成能力」とは、他者と協働して取り組むためのコミュニケーション能力のことである。また、「自律的に行動する能力」とは、現在行っていることをメタ的に認知し、行動の改善を図ることができるメタ認知能力のことである。幼稚園教育課程においても、これらのキーコンピテンシーの育成につながるような、環境整備が大切になっていく。

情報を整理したり、メタ認知能力を育成するためには、知識を構造化・体系化することが、最初のステップとして大切である。知識を関連づけることや、グループ化すること、順番や大きさなど他のものとの比較は、領域「環境」においてもねらいの1つとなっており、活動や遊びを行う際には、ここに挙げたキーコンピテンシーを意識することで、体系的なカリキュラム作成が可能になると考えられる。

Ⅲ－3 SDGs 時代の「環境」

保育における環境教育プログラム開発の留意点としては以下のように整理されている⁽⁶⁾。

- ①保育活動の柔軟な活用ができること
- ②日本の身近な自然を活用すること
- ③日本の文化・伝統を伝えること
- ④継続的に取り組めること
- ⑤保育者の保育観や自然観が根底にあること

SDGs 時代といっても、領域「環境」のねらいが大きく変わるわけではない。前述のように、より自主的・積極的な態度の育成や、伝統文化に触れる機会を多く作ることで、SDGs 時代の「環境」教

育が達成されるものと考えられる。これは、元来の領域「環境」のねらいが SDGs の考え方とその方向性が一致していたためである。

IV 保育者養成課程における領域「環境」の考察

SDGs や ESD の考え方を取り入れた「環境」を実践していくうえでは、保育者の理解と能力の育成が欠かせない。そこで、保育者養成課程において、SDGs や ESD の考え方を取り入れた教育が行われているのかを検証するために、入手できた領域「環境」の教科書 11 冊を用いて、SDGs や ESD に関する記述がなされているのかを検証した。教科書は SDGs がまとめられた 2015 年の翌年である 2016 年以降のものに絞って用いた。

ここで、SDGs や ESD に関する直接的な記述に加え、自主的な姿勢を育む自然体験、地域の活動や行事、文化や伝統、持続可能な活動を困難にする主因である少子化、SDGs でも強く協調されている多様性理解のための特別な配慮が必要な子どものための支援に関して、調査した。内容とともに記述があったものを「○」、概要のみで内容まで記述されていなかったものを「△」、記述がなかったものを「－」として、表 1 にまとめた。

表 1 各教科書における ESD 関連内容

	自然体験	ESD・エネ	SDGs	地域・行事	伝統・文化	社会・少子化	支援
教科書A	○	－	－	△	－	－	－
教科書B	○	○	－	△	－	○	－
教科書C	○	－	－	○	○	－	－
教科書D	○	－	－	○	○	－	－
教科書E	○	－	－	○	○	－	－
教科書F	○	○	－	○	－	－	－
教科書G	○	○	－	○	－	－	○
教科書H	○	○	－	○	△	－	－
教科書I	○	○	－	○	－	○	○
教科書J	○	－	－	○	○	－	○
教科書K	○	－	－	○	○	○	－

「自然体験」に関しては領域「環境」の中心的な内容となるため、すべての教科書において、多くの頁数を占めていた。その内容は以下のように分類される。

- ①年齢・発達段階別の自然とのかかわり
- ②季節別の自然とのかかわり
- ③園庭・ビオトープ

④飼育生物

これらの項目に関し、多くの具体的な活動例を紹介しながら、また、実際の保育をイメージできるように写真や絵を用いながら記述されている。①に関しては、同じ植物であっても年齢ごとに子どもの捉え方が変わるため、体験させる活動内容も変えなければならない。②に関しては、自然を対象とするため、季節が重要になることは当然であるが、その季節的な変化も大切にしながら、カリキュラムを組んでいくことが大切である。③、④に関しては、直接触れ、観察することが大切であるとともに、保育者の知識や経験、指導力が大切である。

ここで、野外の自然物（林、森、山、川、海など）と園の中の自然物との管理上の違いについて述べる。野外の自然物は、人工物では無いため、管理が十分でなく、川の途中に急に深くなっている場所があったり、カエンダケやウルシなど、触れてはいけない生物がいるなど、活動する場合は、入念な下見と当日の安全管理が重要である。一方、園の中の自然物は、表2のように分類されるが、原則的には、植樹や動物も含めて、管理物に当たる。管理物の管理は園に責任があるため、担当を決め、定期的な安全管理チェックを行うとともに、園内の植生、昆虫や鳥、害虫などを把握しておく必要がある。管理をしっかりと行うことで、子ども達の活動の自由度が上がり、より充実した体験となる。

表2 自然体験のための環境に関する分類

管理物	室内玩具
	室内の飼育動植物
	園庭の玩具
	園庭の植木・花だん
	園庭の畑・作物プランター
	園庭ビオトープ
自然物	野外の林、森、山、川

ESD に関しては、幼稚園教育要領にも持続可能性について明記されているので、内容として盛り込むべきだと考えるが、約半数の教科書で ESD という言葉が使われていない。また、SDGs に関しては、すべての教科書が SDGs の国連採択後に作成されたものにもかかわらず、記述がない。幼稚園では、小学校、中学校と異なり、教科書が無い。そのため、保育者養成課程で、SDGs や ESD と幼稚園教育との関連性に関して学ぶ機会が無ければ、学ぶ機会が無くなってしまう。園への就職後に研修を受ける機会があるかもしれないが、大学の教科書においてでも約半数で取り扱われない内容が研修で取り上げられる可能性は低いのではないだろうか。

次に、地域との関わりに関して、持続可能な社会づくりの構成概念としては、多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性という 6 つの概念が提示されている⁽⁷⁾。幼児期にふさわしい自然との関わり国際社会との関わりを考える際、まずは保育者が意識的に学び、保育のなかに位置づけ

ようと取り組む姿勢が大切である。そこで、保育者がまず ESD についてその重要性和概要を把握したうえで、環境やカリキュラムに落とし込む必要がある。また、前述のように幼稚園教育要領に「持続可能な社会の創り手となることができるように」と記述されており、ESD と地域との関わりに関して、関連させて活動を行うことが効果的である。例えば、子ども神輿の地域行事を行う際に、単に体験させるのではなく、地域社会・文化の一員であることが子どもに伝わるように取り組ませること、などである。これを実現するためには、地域住民と子どもとが、相互にコミュニケーションをとれるような機会を設定する必要がある。相互にコミュニケーションをとることにより、子ども達は、自分自身が地域の一員であることを自覚し、また自分の役割にも気づくことが出来るのである。さらに、文化的・歴史的な背景にも触れる機会にもなりえる。

また、持続可能な活動を困難にする主因である少子化に関しては、わずか3冊に記述があるのみであった。基本的な事項であるため、領域「環境」の教科書では省略されているのかもしれないが、他の領域よりも、SDGs や ESD に関しては「環境」が親和性が高い。そのため、社会問題の根源的な原因の一つである少子化について、触れておくべきではないだろうか。

最後に、特別な配慮が必要な子どものための支援に関しては、3冊の教科書に記載されているのみであった。特別な支援が必要な子どもには合理的な配慮が必要とされ、そのための環境も準備されなければならない。そのため、近年割合が増加している特別な配慮が必要な子どもに関する事項も欠かせないものであると考えられる。

以上の項目を総合して考察する。すべての教科書に SDGs に関する記載が無いだけでなく、ESD、地域・行事、文化・伝統、社会・少子化、特別な配慮に関して、5項目すべて記載されている教科書もない。SDGs や ESD の考え方をしっかり取り入れた内容にするために、教科書の充実とともに大学教育の改善が必要である。

V おわりに

これまで述べてきたように、SDGs や ESD の考え方に基づいた考えは、これまでの教育内容にも含まれており、また幼稚園教育要領の改訂に伴い、領域「環境」により明確に記載されている。そこで、カリキュラム全体を通して、①自主性を育むこと、②地域社会や伝統に親しむことを充実させていくことが大切である。

しかし、保育者養成課程に用いられる SDGs や ESD の考え方は十分な内容とはなっていない。今回、検証していないが、就職後の研修においても、体系的な研修はあまり行われていないものと推測される。SDGs 時代の保育者養成に関して、SDGs や ESD のより一層の理解と内容の改善が必要である。

<引用文献>

- 1) 外務省ホームページ 「JAPAN SDGs Action Platform」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>
- 2) 松原恭司郎「図解ポケット SDGsがよくわかる本」
(株) 秀和システム、2019年12月、p24
- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領（平成29年告示）」
- 4) 文部科学省「幼稚園教育要領（平成 29 年告示）改訂のポイント」
- 5) 文部科学省「教育課程企画特別部会 資料 2」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_3.pdf
- 6) 若月 芳浩、「環境の指導法 改訂第 2 版（保育・幼児教育シリーズ）」
玉川大学出版部 2019 年 2 月、改訂第 2 版、p124
- 7) : 研究代表者 角屋重樹「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究
2002 年 p5

<参考文献>

- 1) 岡 健「演習 保育内容『環境』：一基礎的事項の理解と指導法一」
(株) 建帛社、2019 年 7 月
- 2) 榎沢 良彦、入江 礼子他「保育内容環境（シードブック）」
(株) 建帛社、2018 年 5 月、第 3 版
- 3) 神長 美津子、堀越 紀香他「保育内容 環境（乳幼児教育・保育シリーズ）」
(株) 光生館、2018 年 3 月
- 4) 吉田 淳、横井 一之、「環境（新・保育実践を支える）」
福村出版（株）、2018 年 3 月
- 5) 大澤 力、谷田貝公昭、「環境（〈新版〉実践 保育内容シリーズ）」
(株) 一藝社、2018 年 3 月
- 6) 小川 圭子、矢野 正、「新・保育と環境」
嵯峨野書院、2019 年 4 月
- 7) 福元 真由美、無藤 隆、「事例で学ぶ保育内容〈領域〉環境」
萌文書林、2018 年 4 月 新版
- 8) 大沢 裕、野末 晃秀、谷田貝 公昭（監修）、「環境（コンパクト版保育内容シリーズ）」
一藝社、2018 年 3 月
- 9) 酒井 幸子、守 巧、他、「保育内容 環境—あなたならどうしますか?」
萌文書林、2016 年 5 月

- 1 0) 若月 芳浩、「環境の指導法 改訂第 2 版 (保育・幼児教育シリーズ)」
玉川大学出版部 2019 年 2 月、改訂第 2 版
- 1 1) 岸井 勇雄 無藤 隆 湯川 秀樹 (監修)、「保育内容総論 (保育・教育ネオシリーズ)」
同文書院、2019 年 3 月、第四版

Abstract

In 2015, the UN proposed the SDGs. In today's changing world, it is necessary to raise children who are able to think independently and in a variety of ways to achieve social sustainability. In this study, we clarify the relationship between the policies indicated in the Kindergarten Education Guidelines announced in 2017 and ESD and SDGs. In addition, in order to examine the ideal way of childcare education, we will use textbooks for childcare courses currently used. Then, I considered how the concept of ESD and SDGs has been incorporated into the current childcare training.

The current Kindergarten Education Guidelines contain a statement on sustainable education. It also indicates that education that directly incorporates the concept of ESD will be provided. However, about half of the textbooks used in childcare courses do not describe the word ESD or the concept. A curriculum that incorporates this concept of ESD requires the following in addition to a direct description of ESD: Regarding local events and culture, the background of issues such as declining birthrates and special support needed to raise diverse children. There are no textbooks with all these statements. There is a need for better understanding and content improvement of ESD and SDGs regarding childcare training in the SDGs era.